シンフォギア外伝ー卑色の絆ー

なばかりのはばかり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ノーブルレッドができるまでの過去編。

ミラアルク、エルザ、ヴァネッサの全三篇。

多分な自己解釈が含まれております。

追記

ノーブルレッドとして風鳴訃堂に遣われている時のお話を追加。

目次

ミラアルクの場合 ―― 1
エルザの場合 ―― 7
ヴァネッサの場合 ―― 13
迷宮の終わり1 ―― 21
迷宮の終わり2 ―― 26
迷宮の終わり3 ―― 29
迷宮の終わり4 ―― 34

ミラアルクの場合

スロバキアに卒業旅行で行く事になった。
卒業旅行として高校最後の青春を目いっぱいに楽しんでやるぜ。
「やっぱり青の教会は外せないぜ」
内装も青、外装も青、ぜひ生で見てみたい。
友人はスロバキアと言えば城だと言ってきかないけれど、壊されて放置しているような建物だって多いのに何が面白いのかわからないぜ。けどまぁ、旅は計画を立てている時が一番楽しいって言うが、意見の衝突はできれば避けたいとろこだぜ。訪れてみれば意外と面白いのかもしれないし、どこかで折り合いを付けれればいいのだが。
そんな風に何週間も前から友人と怒ったり笑ったりしながら計画を立てて、当日。
「晴天快晴。雲一つない気持ちのいい空だぜ」
春が近いとは言えそれでも寒いのだが、外気温なんぞなんのそのだ。
おススメされたチェルバニー・カメン城は映画で見た事ある場所で、荘厳明媚だったが、デヴィーン城はナポレオンに攻め落とされた時のままらしいのだが、争いごとの跡地ってのは見てもつらいだけだぜ。
翌日の教会巡りをしていると宿屋の老父に勧められた博物館の近くに来ていた。
「ミクラーシュ刑務所には行ったかい？」
元刑務場を拷問道具の博物館として展示している、という言葉に友人は食いついており、自分は隣接する庭が美しいという話に興味が沸いた。
「せっかくだから寄って行こうぜ」
バスの時間にも余裕がある事だし、よい時間潰しになるだろう。
生々しい拷問道具が整然と並んでいるのが逆にホラーなんだぜ。あの梨みたいなのとかどこにどうするつもりなんだよ。
それらを嬉々と見ている友人に声を掛ける男がいた。

「これらを実際に使用してみませんか。生命や人権に配慮した形で。まぁ、ごっこ遊びのようなものとして楽しむ会があるのです」
「明らかに怪しいんだぜ」
　という制止に対して男は有名人や権力者の名を列挙して、彼らが会員の健全なるクラブです。と名簿を覗かせる。
「どうせなら、会ってみますか。その方が安心でしょう?」
　甘言である。
　だが、そのようなクラブがある事自体は珍しい事ではないし、最悪すぐに逃げればいい。
　何よりも興味津々の友人を放ってはおけないぜ。
「わかったぜ」
　着くとそこはいわゆるＳＭクラブだった。
　覆面や目隠しをした男女が鞭で打ったり打たれたり、三角木馬に跨った男が妙に上手な馬のマネをしていたりと結構刺激的な光景なんだぜ。
「最初は見て回る程度でよいでしょう。ただし、プレイの邪魔はしないよう気を付けてください」
　男はテキトウな酒を持ってきて渡し、去ってしまう。
　するとまともに服を着ている男が近寄ってきて口説き始める。
　褒められて悪い気はしない。勧められるままに酒を飲み、気分がよくなって軽く鞭で人をぶってみた。
　なんとも言えない高揚感が身を包む。服を捲ると赤く腫れているのが見えて罪悪感が沸いてくるのだが、相手の男が恍惚な表情をしているのを見ると罪の意識はなくなってしまう。
　旅の思い出に少しばかりクレイジーな部分があってもいいんだぜ。
　今度は自分が鞭で打たれる番。
　軽い、革の叩く音がする。衝撃の後に火傷のような熱が一筋走る。けれど、酒のせいもあってか痛みが苦痛じゃない。かさぶたが取れそうな時に無理矢理はがすような身を寄せたくなる痛みだ。
「あっ」
　思わず漏れた吐息がハメを外す最後の鍵だった。

縛られ、縛り、首を絞め、絞められ、乱暴に服を脱がされるがままに裸体を晒し、陰部を擦り合う。
肉体に与えられる刺激とは逆に陰部への刺激は優しく撫でるような甘いもの。
異物が体にねじ込まれる。熱くて固いものが体の中で前後する。
付けられた傷が快楽を後押しする。
「もっと……」
ほしいのは傷か、快楽か。
溺れるうちに気を失っていた。
夢の中で私は両親と楽しい食事をしていた。
暖かい食事をひっくり返すような衝撃を受けて目を覚ます。
「――」
声を出そうとして口が塞がれていると気づく。
布を噛まされている。手足も縛られているから目配せのみで周囲を確認すると、友人も同じような状況で眠っていた。
体が揺れる。
トラックの荷台に寝かされているようだ。
二度、三度と大きな揺れが続いてやっと現状を理解する。
「――ッ」
パニックになって叫んで、体を揺らして助けを求める。
物音に気付いたのか男が運転席から覗き込む。
「もう起きたのか。薬物耐性があるならパヴァリアにいい値段で買ってもらえるかもしれんな」
「――っ!!」
声にならない抗議の声を上げる。
「騒ぐなよ。いや、騒いでももう遅いが、あまりにうるさいと指の一本や二本は切り落とすぞ」
抑揚のない声が脅しじゃなくやると言ったら冗談抜きにやると暗に理解させる。
ここで焦ってはいけない。どうにかして逃げ出さなくては。
手足を縛るロープから抜け出せないかと試行錯誤してみるが緩み

そうにない。
　そうこうしているうちに目的地へ着いてしまったようだ。
　エンジンを掛けたままに停車したトラックは運転者を交代してまた、走り出す。今度はゆっくりとした進みで揺れも少ない。音の反響が聞こえてくるのでどこかの建物に入ったのかもしれない。
　少しして、トラックはエンジンを停めた。
　荷台が開き、光が射し込む。複数人の影が見える。
「薬物耐性優良可能性が一人。これは伝承の化生再現に回すか」
「こっちは俺がもらう。ファウストローブの研究資材が足りないからな」
　勝手な事を。
「――ッ！」
　最後の足掻きだ。金的でもくらえッ。
　身動きが取りづらい中でも肩を起点に一蹴りくらいはやってやれる。
　だが、男であろう人影は身動ぎもしない。
「完全を求めて男の象徴切り落とした甲斐があったな」
「カリオストロには遠く及ばないがな」
　軽く笑い合っている。
　まるで荷物のように運び出された後の事は思い出したくもない。いや、思い出したくても何をされているのか説明する知識がない。奴らの実験は私の知っている現実とあまりにかけ離れていた。されるがままに与えられた力。怪力や飛行を可能とする外套を奴らはカイロプテラと呼んでいた。目もいじられ、化け物として、実験動物として私の体は改造されていく。
　何が怪物だ。お前たちの方がよっぽど化け物じゃないか。
　憎しみと怒り。
　軽率な行動をとって快楽に溺れた挙句が今だ。かどわされたとは言え、後悔が強い。
　何よりも友人が今、どこでどうなっているのか不安でしょうない。
　だからこそ、何か行動をしないといけないと怒りに身を焼かれる。

だが、焦ってはいけない。奴らは組織だ。たとえこの力を使っても全開で使えばすぐに稀血が必要な状態になってしまって逃亡できなくなってしまう。
タイミングを計っていると、その時は意外にも早く来た。
長い髪をした褐色肌の女研究員が来た日は警備が緩いと気が付いた。組織に一人くらいは無能なのがいたって不思議には思わないぜ。
「稀血まで残していくなんて、間抜けにもほどがあるぜ」
本来は輸血方式で循環させるものだが、私は飲むだけで問題ない。そういう改造をされている。
「千載一遇！　大脱出のために大出血サービス！　全開で行くぜっ！」
友人がいるフロアだって把握済みだ。後はそこに向けて文字通りの突撃だぜ。
外套を纏って壁も床も人もすべて叩き伏せて直進する。
フロアにつくと友人が目に入る。
外見に変化はない。内側はわからないが細かいことを気にしてる時間はないんだぜ。他にも捕らわれたであろう少年少女たちもいたが、お構いなしだ。大切なのは一つだけなんだぜ。
「迎えに来たぜ」
彼女の目は怯えに満ちていた。
当たり前だ。自分の体を好き勝手に弄繰り回され、道具や実験動物と呼ばれ、今までの18年間のどんな不幸も霞むくらいに悲劇的な日々を送って、まともな精神でいられる方がおかしい。
「大丈夫。ちゃんと戻れるから」
日常に戻ったらまた旅をしよう。今度は安全な場所に行こう。刺激なんてチープなものだけでいいからまた、あの日のように怒ってケンカしても笑って仲直りできる場所に戻ろう。
「来ないで……」
「何を、言ってるんだぜ……」
実験室のマジックミラーに映る自分は、こうもりの翼を生やし、怪物の手足を持ち、体中に血と肉片を纏っていた。

「これが……」
私？
「化け物!!」
酒と快楽に溺れた時を思い出していた。
痛みが心地よく自分を否定する。否定する自分がそこにいる事を快楽が紛らわす。
罪も罰も、すべて傷が癒してくれる。
「『首輪』を使え」
どこか遠くからした声に続いて意識が刈り取られていく。
この手の血は、私のものだろうか。

エルザの場合

世界には鍵が掛かっている。
誰かが外から鍵をしていて、用がある時だけ扉は開かれる。けれど、私めは外に出る事は許されないのであります。
ある日、鍵を開けたのはいつもの人ではなかった。見たこともない男たちが扉から入ってきて私を保護した。事情聴取を受け、養父母は逮捕された。新しい保護者が当てがわれ、新しい鍵が掛かった。
新しい家は家ではなかった。
パヴァリア光明結社を名乗る彼らは私めを改造した。
野生動物や他の実験体と闘わせ、データを採る。ただのそれだけだ。ご飯も毎日出るし、布団も暖かい。頼めば本を読ませてくれる事もあった。とくにヴァネッサという研究員はよくしてくれる。褐色の肌、優しく見守るエメラルドの瞳が綺麗なのであります。彼女に言うと次に会う時には本を持ってきてくれる。
本が好きだ。
見たこともない世界がたった一冊の中に詰め込まれている。知らないはずの景色を知ることができて、見ることができない世界を頭の中だけでも思い浮かべることができる。本を読んでいる時だけは世界に鍵が掛かっていない。
「エルザちゃんはどんな話が好き?」
獣の遺伝子を組み込まれたせいで生えた毛深い耳が撫でられる。
「シンデレラが好きであります。どんなに不幸でも手を差し伸べてくれる人がいると思えれば、今を乗り越えられるのであります。ヴァネッサは私めにとっての魔法使いです」
その言葉に眉根を寄せて笑う顔は悲しそうでありました。
施設が実験体によって破壊される事件があった。被害は甚大であったが結社はすぐに復旧して実験も再開された。だが、警備が厳重になってしまったためにヴァネッサと会う機会が減ってしまった。
「今日の実験相手は私だぜ」
不貞腐れたような少女は肉肉しい翼を生やしていた。

模擬戦闘として実験体同士を競わせる。勝っても負けても改良点を見つけては改造されるのだからモチベーションは上がらない。中には殺してくれと戦闘中に囁く者もいる。

この相手は今、何を思っているだろうか。

コウモリのような肉翼は手足に移動して怪力を発揮するアタッチメントらしい。

私めだって一つずつしか使えないとは言え、複数のアタッチメントを持っているのであります。

戦闘は一方的だった。

相手は器用にも肉翼と怪力を使い分けて俊敏な動きを見せ、ヒットアンドアウェイを繰り返し、大きな隙ができたところを潰された。

何もできなかった。アタッチメントの交換に時間が掛かりすぎるせいで対処が遅い。

動くことができない私めに彼女は冷たい目を向けてきた。翼がすべて片腕に集まり巨大な拳を形成する。あんなもので殴られたらさすがに死ぬであります。

「そこまで」

研究員の制止を無視して拳は振り下ろされる。

「『首輪』起動」

「――ッ」

悲鳴を上げて少女は倒れた。

反抗的な態度をとれば私めらはあのように活動を停止させられる。

実験が終わった後、私めは考えていた。どうすればアタッチメントの交換速度を上げられるのか、と。

尻尾状のアタッチメント。腰部に接続して伸縮し、獣の顎になり、拳になり、身を守る盾にもなるが一本しか使えない。接続していない間は何もできない無防備状態だ。そこを何とかしないといけない。

ヴァネッサと会えない日が何カ月と続き、読む本もないために考えることがない。だから、目の前の問題に手を伸ばす。それがたとえ、自分を世界から遠ざけるものだとしても。

実験戦闘と改造を繰り返す日々。

肉翼の少女とも何度か戦闘をしたが未だに勝ったことはない。
戦闘の合間に彼女は語りかけてきた。
「実験体のまま生きていくつもりか?! ここから出ようとは思わないのか！」
「どうやって出るつもりでありますか！ 出て行ったところで何をするつもりですか?!」
「戻りたいとは思わないのか? ここに来る前の日常に?!」
「――あんな場所に誰が戻りたいと思うでありますかっ!!」
言ったところで相手は過去を知らない。
私めも相手の過去を知らない。
「だったら、ここで死んだほうがマシだぜ」
巨大な拳が我が身に迫る。
「だとしても！」
アタッチメントを自切して囮にする。
交換に時間が掛かるのならば、交換する時間を作るだけであります。
新しくなった尻尾が相手の喉元に食らいつく。
「死んだらそこでお終いなのであります。いつかきっと、どこかで逆転できる日が来るまで生きるしかないのであります」
たとえ怪物に成り果てても。
初勝利は苦い思い出になってしまった。
同時に、空虚な思いに満ちていた。
彼女はどこから来て、どこに行こうと思っているのだろう。
戻りたい日常があったのでありましょうか。歳の頃は学生くらいだろうか。やりたい事や将来なりたい職があったりしたのかもしれない。そのすべてが潰えた。
ただ実験動物として浪費される日々。
「戻りたい日常なんて私めには無いのであります」
肉翼の少女とはここ数週会うことはなかった。
代わりに、ヴァネッサと再会した。が、それは望んだ形ではなかった。

「なんで……。どうして、あなたがそこにいるのでありますか……」
実験動物が傷つけあう研究ルームで相対する。
「何かの実験でありますか。人が相手ではあまりに危険過ぎるであります」
『心配するな。それもただの怪物だ』
マイクを通した声が室内に響く。
「ヴァネッサ……」
俯き、唇を噛んで押し黙っている。
何があったのか全部、聞かせてほしい。どういったことが起これば研究員が実験体に身を落とすのか、どんな実験をされたのか。
聞いて、どうする。
事情を理解したからと言って何ができる。どんな解決ができる。
私めには、灰被りの少女を助けた魔法使いのような力はないのであります。
身動き一つしない両者に嘆息したのか、その日の実験は中止となった。
日を改めて行われた戦闘実験は『首輪』を脅しに強行された。
「何があったのか聞かせてほしいのであります」
「……」
「何も解決できないかもしれないけれど、私めはヴァネッサを知りたいのであります」
戦闘の余白を用いて問うけれど、返ってくるのは冷たく濁った瞳。
指の関節や手首が開いてそこから銃火器が放たれる。
単調な攻撃を躱して懐に入る。
「それが、ヴァネッサでありますか」
「殺してもいいのよ？」
近くで見ると肉体は妙に艶やかで滑らかだ。
肉と呼べない。鉄、というのが一番近い印象だろうか。所々凹んでいるのは他の実験体からの攻撃だろうか。
「そんなこと、できるわけないであります……」
手を止めた二人に続行を命じる声がする。

従わないせいで『首輪』が起動される。意識を刈り取られる。
起きた時は一人だった。
鍵の掛かった部屋には私物と呼べるものは何もない。ベッドが一つあるだけだ。
物理的な鍵など意味はない。殴って開くことができる実験体がほとんどだ。それでも、そんなことをすれば後でどうなるかという恐怖が鍵になる。
ベッドに腰を掛けて己の手足を眺める。
見た目は普通の人と同じ。けれど爪は固く、指先だけでベッドのフレームを握り潰せる。背には獣毛が生え、腰部にはアタッチメント固着のための穴が開いている。頭に手を乗せれば毛に覆われた大きな耳がぴくりと自分の意思とは関係なしに反応する。
「人ではないであります」
ただの人になれば、ヴァネッサと日常を過ごせるだろうか。
思いに耽ると際限がない。魔法使いが現れて一夜だけでも助けてくれないだろうか。なんて、非現実的な空想に身を委ねて自分たちが幸せになる物語を考える。
いろんな話を読んできたけれど、自分で作るというのはこれがはじめてだ。
もしも、自由になれたなら――。
『――――』
部屋の外が騒がしい。
耳をそばだてて声を聞き取る。どうにもパヴァリア光明結社の敵対組織が乗り込んできたようだ。
今、この扉を開けば外に出られる。騒ぎに乗じて遁走してしまえば自由にはなる。けれど、稀血がないと長くは保たない。
不確定の自由と確定した不自由。
葛藤が激しくなるのに合わせるように外の騒動も大きくなる。
「もしも、自由になれたなら」
強く拳を握る。
アタッチメントなしでは大した威力も出せないが、扉を押し破るく

らいはできるはず。

「ヴァネッサを助ける魔法使いになるであります！」

ヴァネッサの場合

パヴァリア光明結社は完全なる命を目指す錬金術結社である。歴史の影に隠れ、自分たちの研究のためならば戦争だって起こしてしまう秘密結社。

私の両親は表の顔は映画製作会社社長、裏で結社に与する。

自然と私も結社に関係し、錬金術の美しさに心を奪われた。

事象を理解し、分解し、己の欲するように再構築をする。それは人に与えられた神の御業。中でも、聖遺物を理解するという困難は私にとって人生を賭してもよいと思える研究であった。

「神様は何を思ってこのような構成物を作ったのかしら」

もしも神様の思惑を理解できたなら、その思いを分解し、再構築することで何が出来上がるのだろうか。

知的好奇心が刺激されると眠れなくなる。熱い思いが沸き上がり、早く先へと進みたくて居ても立っても居られない。

熱意が実績へと結び付き、私の立場は若くして両親に比肩しようとしていた。実験の決定権も施設の管理責任も委ねられる地位に付いた頃、面白い素体が届けられた。

名前はミラアルク・クランシュトウン。高度な解毒代謝能力を持っている。あらゆる毒素を投与され、死に掛ければ蘇生実験を含んだ化生再現を行う。その身は次第に強靭で武骨な四肢と変わっていったが、求められていた怪物には成れなかった。もしも完成していれば不老不死のヴァンパイアと成れただろう。

彼女は何度死に掛けようと瞳の強さを失わなかった。

実験のたびに怒声を上げた。

「あの子をどこにやった!?　お前たちの目的はなんだ!?」

一緒に持ち込まれた少女のことをいつまでも心配していた。

あちらはファウストローブの外装実験に回されていたはず。不完全な外装しか未だにできていない現在、大したバックファイアも受けずにいるか、出力を得るために無理くりな神経回路拡張でもされているか。

私は興味が沸いた。
出来損ないの怪物と成り果てても友人の心配をする心理。
その思いを理解できない。今までに幾百と実験体を見てきたが、ほとんどが罵詈雑言を吐いた後に解放を願い、最後は従順なペットとなる。当然のように使い捨てられる命が、今までとは違う反応を示すなら、理解したい。
「ヴァネッサ、最近は本願の研究がおろそかになっているんじゃないか？」
「私たちの目的はあくまで完全な生命。横道に逸れている暇はないのよ」
両親は表の仕事もあってか研究職としては私に数段劣る。そのことを気にしているのか最近は当たりが強い。それでも、私を理解してくれる人たちだ。期待に応えたいとは思っている。
理解こそが最大の愛である。
費やした時間が多ければ多いほどに愛は重い。両親が私に掛けた時間は膨大であろう。その分、理解も深く、期待も重い。
本願、完全な生命の研究に掛ける時間を増やした私の下に興味を逸らす実験体がまた一人、増えた。
エルザ・ベート。
養父母からの監禁虐待を受けていた少女を保護という名目で結社が引き取り、神経回路の拡張実験に充てられた。
彼女は当初から協力的だった。激痛を伴う手術も、元人間の実験体との模擬戦も文句ひとつ言わずにこなしていく。周囲の構成員が躾の手間がないと楽観的に思っている中、私は恐怖していた。
求められた役割をこなすだけの人生。
そこには意思がない。決定のためのルールがない。言われたことに肯くだけの傀儡。
ミラアルクは人外の化生となっても人として友を思う。
では、この子は何と成って何を思う。
空虚な人形に、どの実験体にも抱かなかった恐怖を感じた。
だからこそ、理解をしようと努めた。私的な会話を繰り返し、要望

通りに応えて本の差し入れを行い、彼女が何に怒り、喜び、楽しみ、悲しむのかを知ろうとした。
すべての研究から距離を置いてエルザとの交流に時間を費やし、私はついに彼女を理解した。
エルザという小さな女の子は、ただの少女だ。
幼少期に実父母が死去した後、引き取った養父母は躾として彼女を暴行し、監禁した。そのせいで世間を知らない。ソフトクリームを食べたことがない。本が好き。何事にも真面目に取り組む。頭を撫でられるのが好き。爪を切る時にくすぐったい顔をする。玉ねぎが苦手。ピンク色が好き。黒も好き。黄色は嫌い。小さいことを気にしている。私がつける薔薇の香水がお気に入り。
他にもたくさんの事を知った。何も恐怖する相手じゃないと理解した。
そして、自分が今までしてきたことはただの少女を傷つけ、人ではないものにして、使えなくなったら物のように廃棄する行為。
理解は愛だ。
私は実験体を愛してしまった。
懺悔の気持ちを抱えながらも今まで通りの日常を過ごしてしまう。今更、私に何ができる。何をすれば贖罪となる。
「ファウストローブの実験体処理申請です。また、新しいのを買ってきますね」
部下の男が何気なく書類を手渡して帰っていく。
彼には妻子がいる。若くて愛想のいい奥さん、小学校に通う快活な息子。普段は大学の講師をしていたはずだ。その日常に、一人の少女の命を紙切れ一枚にサインして廃棄して帰っていく。
私には理解できなかった。したくもなかった。
「実験体の待遇改善ですって？」
「必要ないだろう。壊れたら代えればいいだけだ」
両親に相談した結果は予想通りの反応だった。
わかっていた。
だから、これは賭けだ。

ミラアルクの警備を緩くすれば彼女はきっと暴れるだろう。廃棄寸前の友人に会うために施設に混乱を起こし、もしかしたら助け出せるかもしれない極めて低い確率の賭け。
結果、彼女は友人と再会したところで捕らわれてしまった。
管理責任は問われたが私に懲罰が下ることはなく、施設も元通り。
何も変えられなかった。それどころか警備は厳重に、実験体の扱いは苛烈になった。
「ごめんなさい……」
誰に謝っているのかもわからない。
けれど、誰かに許してもらわないと私は生きた心地がしなかった。
後悔と懺悔の中、私は事故にあった。
ファウストローブの開発中に起こったエネルギー暴発。
小さな光がゆっくりと拡散していくのが見えた。脳が死を悟って認識力を底上げしているのだ。走馬灯を見たところで解決策なんて思い当たらない。永遠とも思える光の拡散を見ていると、これが罰なのかもしれないと安堵した。途端に光は認識外の速度になって痛みすら与えずに私を裂いた。
目が覚める。ということは、自分は死んでいないということだ。
苦渋に眉根を寄せて身体を起こすと違和感があった。
体が異常なまでに軽い。シーツの沈み方からして体重は増している。だが、重い体を十全に動かすだけのエネルギーが満ちている。
「何が――」
「あなたは実験の最中に瀕死の重傷を負った。生命維持のためにファウストローブの常時展開案である『義体』へと欠損部分を換装した」
部下だった男。
「――そう。経過はどうなっているの？」
「それを知る必要はないな。お前はもう、ただの実験体だ」
その日から私はパヴァリア光明結社の構成員ではなくなった。
元部下たちは淡々と仕事をこなす。耐久実験や常時展開によるエネルギー効率の開発。痛みも屈辱も伴う実験は多岐に渡る。
けれど、私はこれでいいと思った。

自分の行いの贖罪をできているような気がしたから。
だと言うのに、私の実験体運用を承諾したのが両親であったと知った時、涙を抑えることができなかった。
両親にとって私はもう、ただの物なのだ。完全に至ることのない卑金属。
罰のように行われる実験のうち、最もわかりやすいのが模擬戦だ。
今まで踏みにじってきた実験体たちが私に復讐をするための時間。
「どういう経緯でここにいるかは訊かないぜ。ただ、この怒りだけはぶつけないと気が済まないんだぜ」
人外の怪力で叩きのめされ、錬金術でできた金属製の体が傷ついていく。
壊れることすら難しい体。
一番、相対したくなかった少女とも闘った。
「どうして……。どうしてあなたがそこにいるでありますか。ヴァネッサ！」
エルザは問うだけで傷つけようとはしなかった。
それが逆に苦しかった。
壊れ切るまで終わらない実験の日々が私の廃棄よりも先に終わった。
パヴァリア光明結社統制局長アダム・ヴァイスハウプトの死亡によって結社が持っていた政治的圧力が崩壊した。おそらくは風鳴機関と米国の裏工作も働いていただろう。巨大で深淵な結社の崩壊はあらゆる利益を生み出す。当然、私が捕らわれていた施設も管轄の機関が踏み込んできた。
投棄される実験施設。逃げ惑う構成員。困惑する実験体たち。
逃げるなら今だ。
でも、逃げてどうする。人ではなくなった私はどこに行けばいい。
「ヴァネッサ。迎えに来たであります」
私は目を見開いていただろう。
驚き、戸惑っていた。
「魔法使いではない私めでありますが、ここから逃げるかぼちゃの馬

車くらいにはなれるであります」
「あなたは、私を憎く思わないの？」
　手を引いて走るエルザは振り向くことなく言う。
「私めはヴァネッサが好きであります。たとえ、ひどいことをしてきたのだとしても、私めにとってヴァネッサこそが助け出したいシンデレラなのであります」
　似合わない役を充てられたものね。
　なら、似合うことをしよう。
「ただ逃げるだけじゃすぐに捕まるわ。だからいっそ、みんなで逃げましょう」
　元管理責任者として、施設のシステムは把握している。
　システムのハッキングは容易だった。何せ、体が機械なのだから。腹部から伸びるケーブルを施設の端子に繋いで警備システムのダウンと解錠をして施設内を誰でも自由に動き回れるようにしてしまう。
　きっと、逃げ切れる人の方が少ないだろう。確保されてしまう人も多いだろうし、最悪その場で処刑なんてこともある。
　だから、これは今まで散々人の命を弄んだ私の新しい罪。
　これから先、エルザちゃんを人に戻すまでいくらだって犠牲を出そう。
「いいのでありますか？」
　内情を察してなのか、はたまた一緒に逃げる事に同意することに対してなのかはわからない。
　どっちみち答えは同じだ。
「おねぇちゃん判断です」
　騒然としていた施設内はより一層の混迷を極めて爆破や銃撃、錬金術の行使や逃げ出した被験者による暴動で満ちていく。
　逃走するにしても押し寄せる瓦礫を踏破したり、襲撃者を凌いだりするのに力を行使せざるを得ない。
　私たちの体は人と違う。人と違う部分を機能させるために稀血が必要になるのだが、異形の力を使う度に血は汚れて機能不全を引き起こしていく。

走ることもままならなくなってきた。
「……後少しで外なのであります」
行く手に瓦礫が落ちてきても反応が正しく行えない。
思わずエルザを抱いて守るが意味などないだろう。だが、来るべき衝撃は来なかった。
「まったく、こんなところでくたばろうってのか？」
瓦礫が肉肉しい翼でできた腕によって放り飛ばされる。
「ぶん殴ってやりたいところだが、一旦休戦にするぜ」
ミラアルクだ。
「どうして？」
当然の疑問を投げかける。
彼女にとって助ける理由はない。
「あんたのことを殴り足りないだけなんだぜ」
「これがツンデレでありますか」
「ツンデレね」
「デレねぇから！」
彼女にも思うところがあっての行動なのだろう。
そんな彼女のことを知りたいと思って、前にも同じことを思ったと思い出す。
小さく笑った私に二人も小さく笑っていた。
何、と言葉にできないけれど少しだけ理解し合えたのだろう。
外に出ると夜風が頬の撫でる。月が笑う。戦闘の音が細く聞こえるのは制圧が終わりつつあるということだろう。
「逃げ切れた、でありますか」
「とりあえずは、だぜ。闘わないと次はないんだぜ」
「そうね。二人を元に戻してあげないと」
私の言葉に二人は見つめ合ってから言葉を返してきた。
「二人だけじゃないんだぜ」
「三人で、なのであります」

その後、風鳴訃堂に声を掛けられるまで遁走生活を送ることとな

る。
神の力を得ることができればきっと、人に戻れる。
人に戻れたら、今までのつらい過去を受け入れることだってできる。
それまではどんな犠牲だって厭わない。
たとえ何万の血を流そうと構わない。私たちには流す人としての血が無いのだから。
だから、名乗ろう。
私たちは決して廃棄される卑金属などではなく、赤く燃える深紅の血で繋がった三人。
「Ｎｏ　Ｂｌｕｅ　Ｒｅｄ」

迷宮の終わり1

あの外道おやじはとんでもなく金を出し渋る。
活動をするには金がいる。社会の影に埋もれて動くとなるとふつうに生活する以上の金が必要になる。だと言うのに、
「我が風鳴の金は国をさきもるためのもの、一滴たりとも無駄にはできん」
と言って最低限の資金援助しか行わない。
さらには、領収書までも要求する。必要なのか、領収書。落ちるのか、経費で。というか、どこに申請するんだ。
「まぁ、あてはあるから問題ないでしょ」
両親はパヴァリア光明結社が崩壊しても表のツテで生き延びている。温情に頼って金を無心するわけじゃない。もし、私が公の場に出てパヴァリアに関する情報を公開すれば両親の立場は危ういものとなる。実際はそんなことする気はないが、脅しとしては充分に機能した。
「……こ、これが、そふとくり～むでありますか」
エルザは先ほど買ったバニラアイスを右に左にと動かして眺めて、一口ぺろりと舐めては冷たく甘い食感に舌つづみを打っている。
「甘くとろけてクセになる～であります！」
「早く食べないと溶けちゃうわよ」
「は、はいであります！」
「ところで、ミラアルクちゃんは？」
「すぐそこの教会にいるであります」
街の一角に溶け込むように設けられた小さな教会。ミラアルクによるとあれは礼拝堂、主にチャペルと呼ばれる類なのだと言うが正直、差はわからない。平日は催し物や集会を行うことが多い空間だが、現在は数人が祈りを捧げるか聖書を読む程度の静かな空間。膝をついて祈るミラアルクはどこか厳かで、声を掛けるべきか悩ましい。
「もう、出発の時間か？」
出入口で待っていたのはすでに気づいていたようだ。

「ミラアルクは十字教徒でありますか」
「違うんだぜ。けど、ああやって自分より大きな存在を思っていると冷静になれるというか、覚悟が決まるというか」
歯切れ悪く思案を巡らせてから口を開く。
「神様に祈るということは、美しいんだと感じるんだぜ」
目線の先には椅子に座って祈る人々がいる。
「お仕事よ、行きましょう」
声を掛けるといつもの悪戯っぽい笑顔で振り返る。
「ああ、行くぜ」
風鳴訃堂から様々な援助をもらう一方で、振られる仕事はパヴァリア光明結社が残した研究を探ることが大半だ。神の力を統御するという点においてパヴァリアの研究は群を抜いている。研究機関の大半は各国の制圧によって資料も回収されているが、所詮は政府機関の制圧でしかない。錬金術による隠匿は見逃されていることが多い。
私は、その点において錬金術にも聖遺物の研究にも秀でているのだから使い勝手がよいのだろう。
指定された研究機関に足を運んで有益な情報を持ち帰る。今回も同じ仕事。
「とりあえず、いつも通り手分けして探しましょう」
棄てられた研究施設は何度も見てきたが、この施設は妙に綺麗だ。ヴァネッサ、ミラアルクと別れて施設の内部を見て回る。
錬金術のことはヴァネッサほどではないが理解しているでありまず。だから、怪しいと思ったところをカメラに写して後でヴァネッサに精査してもらうのが常だ。
普通は書類が散乱していたり、壊された機材が置かれていたりする。銃撃や爆破の痕があったりもする。そのような中に荒らされていない穴場がある。そこに何かが隠されている。人避けの錬金術は人外の我々には効かないであります。
だが、この施設はすべてが整っている。
書類は棚に並べられているし、機材は電源が入っていないだけで壊れていない。床も壁も清掃が行き届いている。

「まるで、誰かが住んでいるかのようであります」
カラカラとキャリーバックの音が鳴る。
自分の武器である尻尾型アタッチメントが数本仕込まれた箱。唯一無二の武器であるため手放すわけにはいかない。
カラカラ、カラカラ、カラ――。
ふと、立ち止まる。
「何か、おかしいであります」
室内で反響して位置が分かりにくいが、強化された獣の耳には微細な差も聞き取れる。
カロカロ、カロカラリッ。
振り返って気づく。
「同じ音があちらから来てるであります」
空気を伝ってくるために若干の間延びを伴ったキャリーバックの音が背後の曲がり角からしている。
こちらが止まるとあちらも止まる。動きを真似しているのか、だとしたら意図が不明だ。試しに音のする方へ全力で駆けてみたが誰もいない。近づくと音は遠ざかる。
「考えられるのはひとつであります」
空間が歪んでいる。
自分の足音が反響しているのではなく、誰かがついて来ているわけでもなく、自分の足音が自分を追って来ている。
だとすれば、ここはすでに迷宮になっている。
「どこにも、他へ通じる道がないであります」
曲がれども曲がれども同じ廊下、同じ部屋。
いつ、どの段階でこの迷宮に迷い込んだのか。どのような術であるのか。調べる必要があるのであります。
エルザと連絡が取れなくなっている。
「ヴァネッサ、そっちはどうだ？」
『こっちもダメね。もし、残党の仕業だとすれば危険ね。調査は後回しにしてエルザちゃんを探しましょう』
「了解だぜ」

ここは食堂だろうか。
整然と並んだ長机と椅子、カウンター越しに厨房が見える。
「おーい、エルザー。て、いないか」
覗き込んでも誰もいない。
調理器具が手入れされて置かれている。
「油のにおい……」
しかも、つい最近使ったにおいだ。
ベーコン、卵、パン、コーヒー。絵に描いたような朝食のにおい。
「いつの間にか、だぜ」
厨房から顔を戻すと長机の上に朝食が置いてある。
どこの誰だ。ご機嫌な朝食を用意した奴は。
用心しながら近づいていく。においに問題はない。見た目もふつうだ。というか、ついさっきできたように湯気が出ている。ヴァンパイアとして未完成とは言え、感覚器官は人間とは比にならないほど鋭敏だ。においが近づけば気づくはずだし、物を置けばどうやったって音が出るはずだ。感知しないわけがない。
「ヴァネッサ」
『――』
通信機はすでに、誰とも通じなくなっていた。
研究施設に入って数分。ミラアルク、エルザ、共に連絡が途絶えた。
「まさかまさかの罠かしら」
風鳴機関が関わっているかとも思ったが、違うだろう。あちらにメリットのある行為だとは思えない。手を切るにしても早すぎる。一番あり得るのはパヴァリアの残党。ひとりずつ潰していく作戦かしら。だとしたら、大したことない戦力だ。錬金術師の大半は正面から大火力で制圧するような人が多い。小技を出してくる相手なら勝ち目はあるだろう。
「ま、ず、は――」
指から弾丸を撃ち出してばら撒く。
四方八方に弾痕が生じる。瞬く間に傷は消えていく。
「この建物自体に何かしらの術が掛けられているわけね」

錬金術であればエレメントによる構成比の再構築。この場合は土、火を使っているだろうが詳細は不明。

哲学兵装であれば何かしらの伝承を用いているはずだが、見えている要素が少なすぎてこちらもわからない。

「何はともあれ、まずは理解から」

錬金術の基礎に則ろう。

迷宮の終わり2

廊下はどこまで行っても廊下だった。
左手の爪で壁を傷つけて歩き、角を曲がるとその傷がすでに刻まれている。逆走しても左手側に傷ありの壁が現れる。曲がった瞬間に空間も曲がって同じ角に戻っているようだ。
他の廊下へ行くことはできない。唯一、反対側の壁に研究室へ続く扉が設けられている。
「ここに入れ、ということでありましょうか……」
どう考えても罠である。
だが、立ち止まっていてもしょうがない。
「お邪魔するであります」
扉の先にあったのは書類の山で埋まるデスクだった。
乱雑に置かれているだけで荒らされているわけじゃない様子。一枚、手に取って読んでみるとそれは化生再現実験の書類であった。パヴァリア光明結社の研究施設跡地であるのだから当然なのだが、不自然だ。この施設はすでに制圧済みであるため、こんな風に書類が不用意に置かれているわけがない。だとすれば、ここが錬金術による隠し部屋。
「ですが、いつ起動したのでありますか？」
歩いているだけで見つかってしまうなら隠匿にならない。
何かしらの原因、秘匿を明かす鍵があったはず。
ヒントは手近にあった。
「ダイダロスの迷宮」
哲学兵装に関する書類だ。
先史文明が残した再現不可能な技術を聖遺物、人類が時間を掛けて世界の構造を理解し分解し再構築した錬金術。それらとは別に存在する歴史と意識の蓄積によって発生する当然を自明の理とする哲学兵装。
これは怪物がいる場所こそが迷宮という理を利用した迷宮発生兵装についての研究。

施設全体がその兵装であるならば、わたくしめらが立ち入った時点で哲学兵装が起動したと考えられるのであります。
怪物にしか至ることができない迷宮。秘匿の場としてはこれ以上ないだろうが、怪物は入ったら最後、出られない。
「否。出る方法があるはずであります」
開かない金庫に意味はないのだから。この紙束の中に解答があればよいのでありますが。
朝食を目の前にした昼下がり。
湯気立つコーヒーに手を伸ばしてみると熱が来る。だが、動かすことができない。触れているはずなのにカップは微動だにせず、黒い水面に波は打たない。ベーコンや卵、パンも同様だ。
「幻覚か？」
こういう事を考えるのはヴァネッサやエルザの担当だ。私は殴って壁を壊す方が向いているんだぜ。
とりあえず、他の場所に向かってみよう。ふたりに会えるかもしれない。
食堂を後にしようと背を向けた時、雑踏のような音が広がった。振り返るとそこにはお昼時を過ごそうとする数多の人で溢れ返っていた。いや、少し違う。食堂を埋める姿形は人と少しばかり違うところを持っている。耳が長かったり、尻尾や羽が生えている。中には天井に頭が付くほど大きい者もいれば、手に乗るほど小さい者すらおり、人と呼ぶのが危うい存在が席を埋めていく。
「なんだぜ……これは？」
「いらっしゃいませダヨー」
深々と頭を下げる少女がひとり。
「化け物の巣窟へ」
「あら？」
清掃行き渡り、傷をつけても回復するはずの壁に傷が横一文字に端まで刻まれている。辿って端まで行くと、そこから先には傷がない。左右に分かれた廊下と行き来して、そこにしか傷がないことに疑問する。

傷以外の目につくものは何もない。扉もない渡るためだけの廊下だ。
これ以上は何も得るものがないと判断できたので後回しとする。奥へと進むと大量の血液パックが保管されている場所に至った。
パックはどれも空になっており、ラベルから読み取る限り稀血だとわかる。
「予備が手に入ることも期待していたのだけれど」
この様子では残存していないだろう。
そして、稀血が使用されているということは自分たちと同じような人外の存在が潜んでいる可能性を示唆している。
連絡を取れないふたりが心配になって歩みが速くなる。もし、今の事態を引き起こしているのが人外の類であるならば、予想し得ない事態であるかもしれない。
施設内を駆け回るも誰も見当たらず、人っ子一人いない整った空間に妙な居心地の悪さを感じる。
「昔、そんな話があったわね」
行方知れずとなっていた船が見つかり船内を捜索すると、淹れたてのコーヒーや書きかけの日誌が置かれており、パニックや遭難があったようには見えないが船員はひとりも見つからなかった。彼らは一体、どこに行ったのだろうか。
「ふたりが見つからなかったら……」
嫌な思いが胸を満たす。
冷静になれ。考えて、今を理解しろ。恐怖や不安は現実を見る目を鈍らせる。ひとつ、この空間の中で異質な存在があった。壁の傷。あれだけが整然とした空間において浮いていた。あの廊下が状況を打破するはずだと信じてひた走る。

迷宮の終わり3

気分のいい日常なんだぜ。
アジィと名乗る少女に招待されて椅子に座る。あまりにも敵意がなく、唐突な招待に思わずうなずくしかできずに従ってしまった。
「ここはネ、世界からのけ者にされた化け物たちの安住の地。怪物しカ入れズ、人に見つかることのナイ世界なのデス」
子供の舌足らずな音域でかしこまったような口調をするのは、曲りなりにもここを統べる存在だと言うアピールだ。
異形の人たちに勧められて食事を囲む。歌を歌い、気ままに踊って笑い合う。夢見ていた戻りたい日常とは違うけれど、こういうのも悪くない。ここにいる人は自分と同じ実験体のにおいを感じる。
「パヴァリアのせいで？」
「ほとんどはネ。違うところカラ来た人もいるけどもネ」
長い銀色の髪が風もないのになびく。
白い肌に薄いベールが重なったような服を着ている。細い腕を持ち上げて指先で丸を作って覗き込む。
「お嬢さんハ吸血鬼かナァ？」
「成り損ないなんだぜ」
「化け物の成り損なイ？　それは人じゃないカ？」
「？」
覗かれている。
そう感じるのは純粋無垢な瞳が瞬き一つしないから。
「人はもろいヨ。ちょっとしたことでシヌ。でも、怪物はチガウ。死なないヨ」
確かにそうだ。
死なないかは不明だが、稀血さえあれば人より強く生きていけるだろう。
「人に戻りたいなんて、言わないヨネ」
この子はきっと怪物に成った自分を愛している。
「なぁ、一緒に入ってきたふたりはどこなんだぜ？　ふたりもここに

来るんだろう？」
「ちっちゃい子はそのうちネ。でも、あの人はダメだヨ。金属のおねぇさんはダメ。だって、研究者でショ？」
「そっか……」
勧められたコーヒーを断って立ち上がる。
別に、ここに居続けようと思っていたわけじゃないし、ふたりが来たら出る方法を探そうと思っていた。だけど、離れがたいのも確かだ。人に戻ろうとしているが、人でなくても楽しい日常があると夢想しなかったわけでもない。
「行っちゃイヤだヨ。戻れなくなっちゃうカラ」
「戻りたいんだぜ」
和やかだった雰囲気は壊れ、肌を刺す敵意が充満する。
「どうして？　ごはんもある。トモダチもいる。危ないことから守ってアゲル。それでも、ダメ？」
「ダメだぜ」
「そっかぁ」
百はいるだろう怪物異形の数々。それぞれが別々の力を有している。
それらがすべて、こちらを見ている。
「百鬼夜行とは恐れ入るぜ。けど、こっちだって怪物なんだぜ」
書類を端から読んでいる暇はないのでザックリとした分別を行った。
聖遺物に関する研究は省いて哲学兵装を中心に、注釈される化生に関する情報を整理していくが解決の目途が立たない。
「これでは埒が明かないのであります」
そもそも、根本的な見落としをしている気がする。
迷宮が錬金術による隠匿であるのだとして、この書類を隠した当人は出ていく方法を知っているだろう。でも、その方法を残す理由がない。けど、導かれるようにして自分はここにいる。偶然が重なって迷い込んだのだとしたら最悪だ。もう、出る方法は見つからない。
思考に囚われて紙面を眺めているが読んでいない。

進まないページから顔をあげると人がいた。書類の山の中、髪を後ろ手に束ねた女性。振り返る顔は平凡だが冷淡な印象を与える。
「誰で、ありますか？」
相手は答えない。
ただこちらを見つめ、手に持っていた拳銃でこめかみを撃ち抜いた。
「――!?」
理解をするための数秒で死体は消えていた。血痕すら残らず消えた部屋の中を隈なく調べていると、ぎぃと音を立てて扉が開いた。
最悪なんだぜ。
さすがに無数の異形を相手に無双できるほど強くはない。それに、自分たちの血は存在するだけで汚れ、怪物としての力を行使すればさらに汚れる。汚れた血では生命活動すらままならない。だから、稀血を補給する必要があるのだがストックもない。
「大丈夫だヨ。殺さない。ただ、どこにも行きたくないって思っテ？」
「そんなのはゴメンだぜ。私は、私たちは人間に戻って好きなところに行きたいんだぜ」
「人間になンて何でなりたイの？　稀血が必要じゃないダけの特別な力もナイ存在だヨ？」
薄いベールが床を撫でると一体化していく。
アジィが着ているのは服ではなくて身体の一部。なんの化生を再現したのかは知らないが、おそらく周囲の無機物を取り込むか乗っ取るかする能力がある。床と一体になったベールが腕となり、腕を支える胸を作り胴が生えたところで天井に頭打ちとなる。下半身はなくとも自在に床を滑って動く。自分よりも大きい拳が振るわれて、避けようとステップを踏むと手のひらサイズの妖精がアキレス腱を切りつける。膝が崩れる。いっそ体をすべて床に接することで巨大な拳を見送る。立ち上がる時には首なし騎士が剣を振り下ろす。肉の翼で白羽取り、そのまま引き寄せて体勢が崩れたところを殴り飛ばす。
「ぐっ……」
血の汚れが限界に近い。体中が痙攣して眩暈がする。

ふらついたおかげで次に振るわれた拳は避けることができた。けれど、風圧だけで転ばされる。
「もうやめヨ？　あなたが望むなら金属のおねぇさんも迎えるカラ。だから、ここにいよう？」
「魅力的な提案なんだぜ……」
正直、なぜここまで意地を張っているのかわからない。
ここは怪物の安住の地になるだろう。賑やかで和やかで楽しい日常になるだろう。不満も出るかもしれないが、その都度解決するのは人であっても変わらない。外と中、人と怪物。何が違うんだろう。
まったくもって違う。
私が望んだ姿じゃない。私が望んだ日常じゃない。
だから、否定する。
「怪物であることを押し付けられて、黙っていられないんだぜっ!!」
叫びに呼応するかのように壁が崩壊する。
やったのは自分でもアジィでもない。
「遅れちゃってごめんなさい。でも、迎えにきたわよ。ミラアルクちゃん」
ヴァネッサだ。
「あまりにも遅いからダンスパーティを始めちまったぜ」
「随分と激しいダンスね」
何が起こったのかわかっていないアジィが珍しく瞬きをしている。
「何だヨォ、どうやって入ってきたんだヨォ」
「あなたはゴーレムでしょう？　この施設をあなたの体が覆っているから、傷ついても治る。けれど、ゴーレムは所詮土くれ。構造さえ理解すれば分解は錬金術の十八番よ」
「アジィを壊しの？」
建物がぐずりと壊れる。
亀裂が入り、空間がたわみ、壁が剥がれ、天井が崩れて倒壊の予兆を生む。
「ダメだヨォ。アジィが壊れたら、みんないられなくなっちゃうヨォ。外に出ると危ないんだヨォ」

まるで鳴くように声をあげる。
子供の泣き声のようで、小鳥の囀りのようで聞いているだけで悲しくなる。
「ここにいたってジリ貧よ。稀血のストックもないようだし、いつまでもいられる場所じゃない」
「研究者の言うことなんて聞きたくないヨ」
「そう。じゃあ、そこでいつまでも泣いてなさい」
行きましょうというヴァネッサの合図に私は応えられない。
「この子を置いて行くことはできないんだぜ」
「どうするつもり？　この施設とこの子はすでに同一化してしまっているの。この子を助けるなら外に出ることは諦めることになるわよ」
「どうにかできるかもしれないであります」
どこから現れたのかエルザが割って入る。
「この施設、ダイダロスの迷宮のみを壊すことがわたくしめらであれば可能なのであります」

迷宮の終わり４

施設倒壊数分前のこと。
扉を開けて入ってきたのは見慣れた女性だった。
「ヴァネッサも迷い込んだでありますか？」
「いえ」
施設中を見て回ったこと、壁の傷以外はすべて整っていること、戻ってきたら扉が出現していたことなどを説明され、自身も何があったのかを返す。すると、ヴァネッサは不思議な質問をした。
「一番最初に触った書類はどれ？」
一番上に置いてあったものをテキトウにつまんだだけだったのでとくに意識して取っておいてはいない。だが、ほんのちょっと前のことであるため何が書かれていたかは覚えている。
「たしかゴーレムの化生再現の書類でありました」
いくつかの紙でできた山を眺め、記憶を頼りに一枚を抜き出す。
「これであります」
書類を渡すと眺め、考えをまとめているのか沈黙する。
しばらくしてからこちらに目線を戻す。
「どうしてこれを手に取ったかわかる？」
「どうして、でありますか。手近にあったからでありますが……」
「きっとエルザちゃんは導かれたのね。たとえば、この迷宮を作った誰か、ダイダロスにあたる人物」
「ダイダロスでありますか」
過去、賢明な作り手として名を馳せた開発者として名を残しており、ミノタウロスを閉じ込める迷宮を作ったと言われている。アリアドネ―が毛糸を使って迷宮を抜け出す方法を英雄イカロスに教えたことで幽閉され、蝋で作った翼を作って逃避したとも伝わっている。
「哲学兵装や化生の再現において、弱点というのはどうしても残さなければいけないの。弱点や欠点も含めて定義されているからね。だから、ここが本当にダイダロスの迷宮であれば抜け出すための毛糸が用意されているはずよ」

「それをわたくしめは見つけていたと？」
「扉の出現も含めてたまたまにしては出来過ぎよね。まぁ何にしても、構造の理解はできたわ。後はミラアルクちゃんのところに行きましょう」
「わかるのでありますか？」
「多分ね」
　会話が終わる頃、またしてもあの女性が現れた。
　唐突に現れ、銃を持ち、頭を撃ち抜く。
　驚くヴァネッサに先ほど説明した通りの出来事であると添えると彼女は冷静に消えていく死体の観察を行った。
「なるほどね。随分と厄介なことになりそうね」
「わくしめには何もわからないのでありますが」
「すこし、ややこしいわよ？」
　この施設がダイダロスの迷宮であることは間違いない。おそらくは研究対象が逃げないための施策であり、また錬金術師以外を迷わせるための術。だが、ゴーレムがこの施設を乗っ取ってしまった。ゴーレムは作ると勝手に大きくなっていくために制御が効かなくなったのだろう。そして、乗っ取られた迷宮から出るに出られなくなって自殺。最期に、迷宮の崩壊を望んでゴーレムが制御できない研究室に解読者を閉じ込める仕掛けを残した。
「ここだけは制御できない理由は何でありますか？」
「ゴーレムに刻まれているｅｍｅｔｈ、真理という意味の文字からｅを消し去るとｍｅｔｈで死になる。ここはゴーレムにとって触れられたくない場所で、自分でも迂闊に触れられない場所ってわけね」
「あのー、壁を思いっ切りガリガリっとやってしまっているのでありますが……」
　クスクスと笑われてしまう。
「そのおかげで扉が開いたのね。時間差があったのはあの女性の死を見るまでが一行程であるためね。空間がねじ曲がっているために一定の行程が終わらないと影響が反映されないのね」
「じゃあ、この迷宮はもう崩れるのでありますか？」

「この程度じゃ壊れないかな。でも、エルザちゃんは先に外へ出てくれる？　私はミラアルクちゃんを見つけて来るわ」
「一緒に行くでありますよ」
「おねえちゃん判断です。まだ迷宮の影響は残っているから、なぜか迷宮に入れない私じゃないと迷わずに探すのは無理よ」
　迷子になることを心配される歳ではないであります。
　とは口に出せず、大人しく従って外に出るとすでに夜となっていた。昼に入り、一体何時間いたのでありましょうか。外から見る施設は入った時と変わらない様子だが、本当に崩壊するのだろうか。
「それにしてもなぜ、ヴァネッサは迷子にならないのでありましょうか……」
　自分が導かれたのは偶然だろう。ヴァネッサを除外して二分の一で導かれると考えるなら別段おかしくはない。
「まだ、謎が隠されているのであります」
　意を決してもう一度施設へと足を踏み入れる。
　エルザと別れた後、部屋を廊下とまとめて壊してしまう。
　手首や肘を射出口として火器を撃ち、確かに壊れていくことを見送る。すると、かすかに争う音が聞こえる。先までは繋がっていなかった空間から届く音だろう。
　音のする方へと向かって行くと壁が現れた。
　何の脈略もない廊下の途中に現れた不自然な壁。見た目は普通の壁と変わらないが、少し傷つけても修復してしまう。
「エレメントは火と土。対するは水と稲妻」
　水を持ってきていないのが、施設としての機能が活きているようで水道が使える。
　便利な体でよかったと思いたくはないが、手をスタンガンに組み替える。人に対して流せば絶命し得る電流を水浸しにした壁へと流し込む。
「遅れちゃってごめんなさい」
　壁の向こうには傷だらけになったミラアルクと巨大な少女が対峙していた。

「あまりにも遅いからダンスパーティを始めちゃったぜ」
軽口を叩いているが服は擦り切れ、体中に大小の傷を作り、目の焦点も合っていない。
対している少女が先ほど読んだ書類のゴーレムだろう。伝承の拡大解釈で無機物であればなんでも取り込める仕様でダイダロスの迷宮と合一化も果たしている。怪物を飲み込む怪物。けれど、弱点である『e』は消しているのだから放っておけば崩れて消える。その事を察してか少女が小さな声をあげる。
「アジィを壊したの？」
声に伴って建物が悲鳴を立てる。
早く外に出なければ生き埋めになる。とやかく言っているようだが、聞いてやる義理はない。あちらも応じないのだから私ができることはない。行きましょうと合図をミラアルクに送るが彼女は否と返す。
「この子を置いて行くことはできないんだぜ」
どうすることもできない。
哲学とは意識の蓄積である。ダイダロスの迷宮は怪物がいるところが迷宮という哲学を用いている。長い年月を掛けて人類の意識が蓄積して出来上がった檻。そのものと合一してしまったのでは、外に出ることは不可能。何よりも、すでにゴーレムとしての弱点も破壊しているために崩壊は決定的だ。
「何とかできるかもしれないであります」
外に出ていたはずのエルザがいた。
「この建物はダイダロスとゴーレムの二重構造になっているのでありますね？　そして、そちらの方――」
「アジィだヨォ」
「アジィが選んだ人を迷宮に誘い込むのでありますね。だから、ヴァネッサはゴーレムとしての建物にしか入ることができなかったのであります」
「そうだヨォ」
「ゴーレムの『e』はすでに壊れてしまったのでありますが、迷宮の弱

点アリアドネ――の毛糸は壊れていないのではないでしょうか」
この子はいろんなことを考える。
常に新しい道を考える。だから、毛糸に導かれたのかもしれない。勝手に入ってきたのはこの際ノーカンとしましょう。それにしても、このアジィという少女は平然と受け答えしているがどういう情緒をしているんだろうか。口調や仕草からしてエルザよりも幼い印象を受けるが哲学兵装と同化するなんてのは並の時間ではないはずだ。誰も外に出したくないという思いが誰も外に出さないという迷宮の哲学と重なったのだとして、人の一生程度では数千年の歴史の降り積もりである迷宮を抱え込める時間とは幾星霜であろう。いや、子供にとっての寂しい夜は一昼夜よりも長い。あまりの寂しさに頭の中で幾百と物語を作り、現実よりも長い夜を過ごすことになる。慰めが悪戯に時間を引き延ばす。膝を抱えたままに曖昧な時間を過ごしてきたのだとしたら、幼いままでいたいと願うだろう。
幼い。だから、無警戒で、発生した事物に対してただ純粋に受け入れと拒絶を重ねる。
ただの子供だ。
「この場合、毛糸はエルザちゃんが迷い込んだ迷宮で、あそこだけが本来の迷宮ね。物理的には破壊したけれど、毛糸を手繰って脱出したわけじゃないから哲学的には残っているわね」
かすかな希望だけれど、縋ってみようと思う。
「言ってることがチンプンカンプンなんだぜ」
「意味わかんないヨォ」
仲いいわね、このふたり。
揃って小首を傾げているふたりにも分かり易く説明するのは難しい。何よりも時間がない。
「その子を助けられるかもって話」
「ホントか?!」
「ホントも本当。けど、研究者の言うことは聞きたくないんでしょう?」
「むー。アジィ助かるとみんな、どこにも行かなイ?」

「行くわ。行かなきゃいけないところがあるから」
　瞬きのしない瞳が見つめてくる。
「アジィを作った人、一緒にいるって言っタ。けど、どこか行っタ。アジィがお外に出れないようになってカラ、研究室にこもっタ。みんないなくなって、アジィ一人になっテモ、出てこない」
　この子は知っているはずだ。あの研究室で自殺した女性がその人であると。
　そうでなければ、彼女が触れたくない部分である『e』があの部屋である理由がない。ゴーレムとしての位相から部屋が消えていたのも忘れるため。踏み越えなくてはいけない。大切なものを失ったということを。
「あなたが助かるかどうかはあなたの哲学次第」
「テツガク？」
「自分を自分で定義しなさい。さもなきゃ、消えるだけ」
　怪物が他の何かに成れるのかしら。
「さぁはじめましょう。この迷宮の再構築を」
　ヴァネッサ、エルザの話は小難しくてよくわからなかったが、要はアジィを作っている建物の使える部分を寄せ集めて新しい肉体を創ろうってわけだぜ。
「て、できるのか。そんなこと？」
「ホムンクルスを作るのと大差はないわ。この世はすべて理解すれば分解でき、再構築できるもの」
　その程度がよくわからないんだぜ。
　アジィを囲み三人で三点を作る。外には出られないから崩壊しつつある建物の中で早急に済ませ、崩れる前に脱出しないといけない。
「今から三十八万キロの哲学迷宮を作ってアジィを閉じ込めるわ。後はあなた次第」
「どうすればいいんだヨォ」
「外に出たければ毛糸を探しなさい」
　アジィを青い光でできた壁が包み込む。三つの辺でできたピラミッド状の迷宮。壊れかけたダイダロスの迷宮を再構築して生み出

した全長三十八万キロの哲学迷宮を維持するためには莫大なパナケイア流体を必要とし、全身の稀血の汚染も一気に進む。
「これ、力加減を間違えてドカンッといったりしないよな？」
「そんな出力でないでしょ」
「正直、ジリ貧であります」
アジィが自力で脱出するまで保たせることができればいいんだぜ。
青い世界が広がる。
「サンカクだよぉ」
床と二つの壁でできた三角形の青い世界。果てが見えない通路のど真ん中。いつものようにベールを伸ばして侵食しようとするが、飲み込めない。きっと物質とは違うものでできているから。
「毛糸なんて見当たらないんだヨォ」
とりあえず歩いてみる。
歩いていると見慣れた曲がり角に出くわした。いっつもいっつも引き籠っている研究者さん。お外に出て遊ぼうって言うとついて来てくれるけど、お顔は怖いまま。つまらないのかな。つらいことがあるのかな。疲れているのかな。
そんな感じの人がいるお部屋。
いやなことがあったと思うんだヨォ。
何も言わないでどこかに行っちゃった研究者さんはいつものように机に噛り付いていた。
「ごはんだよ」
アジィじゃないんだヨォ？
自分じゃない自分が喋っている。パンに卵とベーコンとコーヒーを添えたトレイを持って研究者さんに近づいていく。野菜も食べた方がいいんだヨォ。
「疲れているなら休めばいいじゃん。いやなことなら逃げちゃえばいいじゃん。なんで、そんなにがんばるの？」
なんて返されたんだっけ。
何をいつも研究してたんだっけ。
「ねぇ。お外にいこう？」

そう言うといつも冷たい顔になる。
けどね、手が震えてるのを知ってるよ。歯を食いしばって冷たくなろうとしていることを知っているよ。
「今日もお外、いけないね」
アジィはね、最初からお外には行けないんだよ。
出たら壊れてしまうから。アジィはまだ生まれてないから外には出られないって言ってたね。でもね、アジィはここから出られなくてもいいんだよ。あなたが笑ってくれたらそれでいいんだよ。
あなた以外の人はどこかへ消えてしまったけれど、あなたはずっとその部屋にいるね。
でも、いるのに出てこないからいないのと変わらない。
外には出られないけど建物の中なら自由に動けるようになって、研究者さんをビックリさせたよ。
けど、悲しそうなんだよ。銃なんて持ってるんだよ。そんなのじゃアジィはビックリしないんだよ。
「これで、外に出られるよ」
やっぱりビックリしたんだよ。
研究者さんは頭を撃って、動かなくなっちゃったんだよ。
「どうして？」
アジィが悪いのかな？
お外に出るのは死ぬことなのかな。だったら、ヤだな。
だから、出なかったよ。外から来る怪物さんたちと中で楽しくやるんだよ。お外は怖いから、死んじゃうから、ずっとずっとここにいるんだよ。
「私は、私たちは人に戻って好きなところに行きたいんだぜ」
吸血鬼のお嬢さんだよ。
好きなところに行く。ここが好きだけど、いる場所には行けないんだよ。
「そう。じゃあ、そこでいつまでも泣いてなさい」
金属のおねぇさんだよ。
アジィは泣いてないよ。わからないだけなんだよ。どうして外に

出たがるのかな。なんで研究者さんが死んだのかな。わからないだけなんだよ。
「どうにかできるかもしれないであります」
小さい子だよ。
どうにかしないといけないのかよ。どうにかしたらどうなるのかよ。
「アジィはどうしたらいいんだヨォ」
「アジィ、これで外に出られるよ」
研究者さんだよ。
「外に出て、自分で考えて欲しい。アジィが生まれる意味を。だから、私は今がんばってるんだ」
そうやって笑うから、好きなんだよ。
研究者さんががんばった意味をアジィは知りたいんだよ。そのためには、お外に出ないと行けないのかヨォ。
「後何分持つ？」
「分も持てばいい方よ」
「アジィが新しい哲学を構築する必要があるのでありますが、それは簡単なことじゃないのであります」
「ガス欠だぜ」
迷宮の壁が解ける。
同時に、建物も崩れていく。
三人は死を覚悟した。たまたま出会っただけの怪物同士だと言うのに命懸けで助けようとしているのは、きっと同情からだった。怪物として生きている彼女が少し羨ましくもあり、外を見ていないだけの愚鈍さを感じてのもの。
命を懸けて同族を救うことで、まだ自分たちは怪物ではないと証明している気になれる。
その甲斐なく、救えずに終わりそうな予感が迷宮と建物の崩壊で感じ取れる。
だが、崩壊は止まる。
ずっと何も言わず、何も起こさず見守っていた百鬼夜行どもが壁を

支える。支える手がない者は三人の真似をして迷宮の維持を手伝う。
喋る体力すら残っていない中、それでも確かな絆があると思えれば無尽蔵の気力だけは沸いてくる。
「アジィ!!」
出力の間借りが多すぎたのか、アジィが迷宮から抜け出したせいなのか不明だが、ピラミッド状の迷宮は爆発して光となって消えた。
きちんとわからないのは爆発のせいで生き埋めになってしまったからだ。
「五体満足なだけ、マシだぜ」
エルザとヴァネッサも無事だ。
とはいえ、汚れきった血では怪物としての怪力は発揮できず、人並の体力もない。
「最後の手段だぜ。いいよな？」
「ええ」
「ガンス」
ヴァネッサの首筋を噛む。
次いで、エルザの首筋も噛む。
吸血能力。ふたりの僅かに残った稀血を取り込んで何とか動ける程度にはなる。対して、ふたりは危険だ。異形と人間を橋渡ししているのが稀血だ。尽きれば生命活動は停止する。
「早いところ処置が必要だぜ」
「なんだかえっちぃんだヨォ」
瓦礫の上、白い少女はほほ笑んでいた。
『して、収穫は？』
風鳴訃堂との通信は三日ぶりだった。
建物の崩壊後、目を覚ます頃には稀血の交換は終わっており、アジィもそのほかの怪物たちもいなかった。ミラアルクは最後まで意識があったはずだからどこへ行ったか知っているはずだが、知らぬ存ぜぬを通している。
「錬金術の仕掛けによって建物は崩壊。けれど、エルザちゃんのおかげでいい資料が手に入りました」

エルザはあの研究室で何枚か写真を撮っていた。
そこには『ボストーク湖』『エンキ』『シェム・ハ』と言った資料が写っている。
『うむ。異形怪物なれど役目は果たしているようだな。だが、ぬかるでないぞ。現物を手に入れねば用をなさぬ定めと知れ』
「はい」
通信が切れる。
「アジィのこと、バレてないみたいだぜ」
「知っていて泳がせている可能性もありありであります」
「それならそれで泳ぎ切っちゃいましょう」
ゴーレムはシェム・ハ・メフォラシュと体に刻まれている。神の力の依り代と成り得る存在。そもそもがあの研究所が神の力の依り代を作る施設だったと推測できる。ゴーレムは胎児。生まれる以前の存在。研究所が胎内であったと考えれば、アジィはそもそも人ではなかった。だが、すでに自分で何かしらの目的を保持したなら自由に外を歩き回っていることだろう。
「それにしても、あの研究員はなぜ自殺をしたのでありますか？」
「死を内包してこその生。ｍｅｔｈ（死）を刻まないとｅｍｅｔｈ（真実）には辿り着けない。きっとアジィが死を受け入れるだけの精神性を獲得するのを待っていたんじゃないかしら」
「私はその姿を見ていないけどさ、そいつは心のどっかで祈ってたんじゃないかなぁと思うんだぜ？」
「祈ってた？」
「何をでありますか」
「アジィが他の誰かと笑える日が来ますように、だぜ」